

蘇芳集

梅を見て

青山

丈

正月の風を下ろして子が帰る
掃初の人参が先づ転がれり
急な坂下がつて行くと白障子
梅を見て坂を下りると神田川
耳打ちに耳打ち返す日向ほこ
袖一つ買ふと買ふものなくなりぬ
見覚えのある葉牡丹へ引き返す

枯葦

宮尾直美

ありありと海へ夕日や十二月
枯葦を見てゐて己れ暮れて来し
わが影の寒々とある門燈下
枯野とはちちははの名を呼ぶところ
雪螢父に晩年なかりける
母の忌と言へばかならず蕪蒸し
大福も猫も好きなり漱石忌

初湯

八木下末黒

青々と風通しけり松手入れ
冬来る軍手ににぎる竹箒
納豆をよく掻きませる霜の朝
納豆の糸が糸ひく虎落笛
包丁を研がねば妻が餅を切る
念入に剃刀あてる初湯かな
水門にバイクを止める初景色

ぼつぺん

吉田幸敏

十二月

木内憲子

真空管点して神を迎へけり
花枇杷や人逝きてより曇り癖
神の手のすさぶにあらず波の花
かの人の中華飯店冬ぬくし(齋藤充さん三回忌)
蟻螂の卵に手触れ雪女
去にし子にぼつぺん一つ二つ三つ
北塞ぐモーツァルトを聴きたくて

柚子湯出て

小川美知子

夕刊が来れば夕暮漱石忌
少年が四五人で来て冬の声
柚子湯出て少し強気になつてゐる
速達を受取りに出る雪催
身も蓋もなく枯れ背高泡立草
歳晩の揺れる電車に揺れてゐる
簡単な間取りの家の年の暮

人ごゑのなかにしばらく冬ぬくし
塵ほどの恙のありて冬の水
二々三言交せば親し冬椿
冬の森本読むやうに深入りす
晴れてより色を放ちて冬木立
冬の森しんかんと刻失へり
ポケットのなかのいろいろ十二月

早ばやと

小島みつ如

早ばやとクリスマスケーキお三時に
花八つ手K女ゆく先笑ひあり
枯木星「玉置」の歌に涙する
人波のゆるゆる終ひ天神へ
手袋ぬぎ撫で牛撫づる娘の祈り
星散りばめいてふ大樹の裸なり
とどまるやいてふ落葉の黄を浴びて

空也の忌

清水裕子

冬 椿

富田正吉

散るやちる落葉はなべて裏を見せ
多彩なる落葉すぎし日振り返る
子らのこゑ高らか落葉きりもなく
小流れに冬の日遊ぶ枯るる中
樹の洞の日射しやはらか空也の忌
北吹いて竹林の雨烟らする
句座果ての息晴ればれと真つ白し

大 噓

下平直子

上 京

野路斉子

悴みて苦言ひとつを口ごもる
推敲に夜を更かしゐる湯ざめかな
しづかなる怒りの言葉息白く
くよくよとものを思へば大噓
十二月八日 G パン洗ひ干す
着ぶくれて長寿の家系とは言へず
野をわたる朝の槌音初氷

上京のけふか明日かと雪女
七階の窓に待つ日も雪女
野は遠し鉢の莖を見て我慢
森と云ふ春の気配のある処
そこかしこ青空会議地虫出て
来ることは来てすぐ帰り雪女
七階の窓にも見えて草青む